

特集「国語の力」を育てるⅣ

—基礎・基本の力—

言葉との豊かな出会い——量と質

筑波大学教授 桑原 隆くわはら たかし

一 言語生活者の育成

国語科教育の究極的な課題は、読みの指導の場合に即して言えば、読書する人（言語生活者）を育てていくことにあるといつてよいであろう。

言葉の習得や言葉の力の発達、ひいては言語生活者の育成は、言葉や、文学作品などの言語文化と豊かに出会っていくことに始まる。その出会いは「質」と「量」の両面から考えていく必要がある。作品や文章として質の高い説明的文章の教材や文学教材を丹念に分析的に指導していく読解指導も重要であることは論をまたない。ところが、教材の綿密な分析を通じた読解力をつけておけば、読書人（言語生活者）が育っていくかというと、必ずしもそのようには言えないのである。もし、国語科教育がこのような教材の綿密な分析を通じた読解指導だけに立脚しているとすれば、それはあまりに安易な前提である。国語科教育における読みの指導の場合、読解指導が中心となっているのが現状であろうが、読解指導なるものを、改めて読書人の育成という観点から問い直し、位置づけ直していく必要がある。

一つの教材に多くの時間をかけてきめ細かに分析的に取り扱っていく指導を質的な指導とすれば、それに加えて、教材文の微視的な指導

言葉との豊かな出会い—量と質



は控えて、さまざまなジャンルやテーマなどの文章や作品に丸ごと出会わせていく指導、すなわち量に着目した指導も必要である。言葉の力を高めていくためには、前者の読解指導に優るとも劣らず、後者の量的に豊かな出会いをつくっていく指導もきわめて重要なことである。

二 耳を豊かに—聞き浸る世界

言葉の学習の出発点は、耳を豊かにしていくことから始まる。豊かな耳を育て、豊かな出会いをつくっていくもつとも初歩的な方法、しかも簡便で有効な方法は、教師の読み聞かせや語りである。

読み聞かせは、必ずしも幼児期の子どもに対してだけ有効というものではない。小学生はもちろんのこと、中学生・高校生・大学生、さらには成人にも有効な方法である。教科書教材の同一作家の作品でもいいし、内容的に関連している作品でもよい。教科書教材とは直接関係ない作品でもよい。その際、メモや記録を取らせるとか、感想文を書かせるといった活動とは切り離して行つてよいであろう。子どもの心を完全に解放して、純粹に言葉の世界、言葉による想像の世界に浸らせてしまうことこそ大切である。映像などの言語外の手段や媒体を活用することも可能であるが、そのような媒体などに頼らずに言葉だけの世界に浸り切る、このことが現代社会では欠けているように思われてならない。

読み聞かせに加えて、教師の語りやストーリーテリングも、もっと取り入れてよいであろう。まとまりをもった一つのストーリーでなく

ても、教師が新聞の中に見つけた記事や、教師自身が感動した言葉の紹介でもよい。教師自身が読みたいと思つている本でもよい。指示・伝達・命令ではなく、楽しく聞き浸る世界の創出である。いい話の種はいつもいつも簡単に見つかるものではないが、教師は言葉の世界、言語文化の世界にいつも鋭敏なアンテナを張り巡らし、教材化研究(教材開発)を心掛けていることが肝要である。それが教師自身の成長の糧ともなり、国語の教室を新鮮にし豊かにし、子どもに豊かな言語生活感覚や、言葉や言語文化への興味関心、意欲を育てていくことになる。

子どもの興味関心を探り、その興味関心と関係つけていくことも重要である。加えてそれ以上に重要なことは、現状の興味関心ではなく興味関心は新たに喚起し、育てていくものであるという観点に立つことである。

三 語彙としての漢字学習

日本語の体系にあって、漢字は大きな比重を占め、漢字学習は日本の文化や国語による認知力(思考力・記憶力・想像力・創造力)に深くかかわっている。

「鬱」という漢字は見るからに「ユウウツ」そんな漢字である。「鬱」は常用漢字にはないが、日常生活において「憂鬱な梅雨」とか、「鬱陶しい天気」とか、「鬱憤を晴らす」といったようによく使われる語彙である。この「鬱」という漢字を筆順正しく正確に書くことができる人

言葉との豊かな出会い―量と質

桑原 隆（くわばら たかし）

1978年から筑波大学に勤め、現在、教育学系教授。主な著書に、『言語生活者を育てる―言語生活論&ホール・ランゲージの地平』（東洋館出版社）『言語活動主義・言語生活主義の探究―西尾実国語教育論の展開と発展』（東洋館出版社）などがある。

は稀まれであろう。読み方が分からなくて漢和辞典を引こうとしても、その部首を知る人も少ないであろう。「鬱」は一字でも語として成り立っているが、先の例にみるように、「鬱」は語彙としてよく使われている。したがって、「字」としてよりも、「語彙」としての重要性が高いといつてよいであろう。「鬱」は常用漢字外で、適切な例とはいえないかもしれないが、漢字学習の一般論として、漢字一字一字を字として練習学習することも必要であるが、語彙として漢字を学習していくことが重要になってくる。語彙として耳から摂取し、記憶し、文脈や状況（コンテキスト）において使えるようになることが大切である。

「鳥肌が立つ」や「氷山の一角」はよく使われる慣用句である。一つ一つの漢字は、字としてもそれほど難しい字でもなく「鳥肌」も「氷山」も難解な語句ではない。しかし、慣用句として使われると、それぞれの字の意味を寄せ集めたものではなく、ある特定のコンテキストで使用される。狂喜や感動したときにも実際には鳥肌がでるかもしれないが、「鳥肌が立つ」は、そのようなコンテキストではなく、恐怖や嫌悪感が生じたコンテキストでの使用が正しい。「氷山の一角」は、悪い意味のコンテキストにおいて使われるのが一般的である。漢字は字としてよりも、語彙として、さらにはコンテキストにおいて取り扱っていくことが基本である。漢字を指導していく際、字としての指導のみならず、コンテキストにおける語彙としての出会いの機会を豊かにしていくことが望まれる。

四 自己評価

評価の中でも自己評価は最高級の評価である。小学校の授業や指導案などを拝見する機会も少なくない。授業などの終末で、「――できたか。」といった過去形による問いの自己評価カードが配付され、子ども自身がそのカードに○△×、321の段階を書き込んだり、感想文や反省文を書いたりするのを見かける。時には「今日の授業の目標を理解していたか。」といった類の自己評価項目もあったりしたが、それを見て筆者は愕然めくせんとした。それは教師の責任転嫁ではないかと思ったのである。子どもに課することはあまりに過酷ここではないか。子どもに自己評価を課す以前に、まず教師自身が毎日の授業を自己評価し、自己評価とはどのようなものかをわきまえることが先決問題である。

小学生の場合、自己評価も相互評価も、言葉に関する量的な評価や形式面での評価は可能であるが、質に関係する評価は難題である。発表の際の声の大きさや、一冊本を読み切るという目標は、子どもでも達成したかどうか評価できる。ところが、「聞き手に分かりやすい発表ができたか。」といった質（構想力）に関わる自己評価は困難である。何となく直観的に子どもは「うまくいかなかった。」ことは察知しているが、その改善策や打開策まで子どもが考えることは無理である。学力が十分に育っている子どもには可能な部分もあるかもしれないが、去形による問いの自己評価から子どもを解放させたい。これは私の哀願でもある。